

すきま風

無罪から無実への通り路

持統院ゆきむら

青山ライフ出版

この作品は「冤罪にスポットを当てたセミフィクションです。

「私はやってない。無罪でなくて無実だ」と訴え、長期に獄中生活送っている人たちが何人か存在しています。

状況証拠で確定判決となり、死刑や無期となっている人たちです。

冤罪問題のなかで、現在注目されているのが、狭山事件の石川氏です。

「となりのトトロ」をモデルにしたと云われる事件です。

別件で逮捕された石川氏は、否認、共犯自白、単独自白を経緯して起訴となりました。一審では「死刑」、二審では「無期懲役」の判決となり、現在は第三次再審請求中です。

「冤罪」として、石川氏への支援体制も全国的に拡がりつつあります。しかし「有罪」は覆る事はありません。

人が人を裁くという事は恐れ多い事です。「やったか、やらないか」、即ち、事実が在ったか無かったかは、当人だけが知るのみです。「私は無罪でなくて無実だ」を訴える石川氏を支える路を求めた作品です。

すきま風
無罪から無実への通り路

県内最多の十五日間に及ぶ審理日数となった今市事件の判決公判後、裁判員経験者ら七人が宇都宮地裁内で記者会見に臨んだ。法廷で勝又氏の取り調べの再生された録音録画映像について「見て印象が固まった。非常に意味はあった」などと口をそろえた。検察、弁護側の主張が全面対立しただけに「答えを出せるか不安もあった」とも。長期間の裁判を終え、ほっとした表情を浮かべる一方、被告に対しては「真摯しんしんに受け止めてほしい」と思いを語った。

法廷で七時間超に渡って再生された被告の録音録画がなかったら判断はできなかった。「大きな部分を占めていた」と裁判員男性は振り返る。N市、三十代の裁判員男性も「判決がどうなっていたかわからない」と、重要な判断材料だったことを明かした。

有罪、無罪の判断を迫られたことについて三十代の補充員男性は「(検察、弁護側の)どちらも正しいことを言っているか揺れ動いた」。Y市、七十代の女性裁判員は「とても難しい判断だったが、何とか終わった」と胸をなで下ろす。

二月二十九日の初公判からの延べ日数は四十日。K市、看護師の女性裁判員は「長丁場で途中で精神的にまいることもあったが、みんなで乗り切れた」。三十代の男性補充員は「緊張で寝付けないう日もあったが、終わってほっとしている」とし、安堵と心身への大きな負担をのぞかせた。

法廷で流れた吉田有希ちゃんの映像や画像に、一部の裁判員らは自分の孫や子どもを重ねたという。一方、「二人の人間として被告の心情とかを感じるところもあった」との声も。

評議のみ行った日数は八日間。裁判員らの多くは「十分だった」としたが、「途中で振り返る時間がない」「足りなかった」とする意見もあった。被告への判決は無期懲役。会社員の女性裁判員は「裁判官や補充員含め真摯に協議したので、被告にも真摯に受け止めてほしい」と語った。

被告の自白は信用できる。

今市事件裁判員裁判の論告求刑公判。取り調べの録音録画映像の再生など踏まえ「有罪」に自信を深める検察側に対して、弁護側は「犯人である証拠は何一つない」と語気鋭く反論した。審理が十五日間にわたる宇都宮地裁で過去最長の裁判員裁判は、最終日になっても、双方が裁判官三人、裁判員六人を前に主張をぶつけ合った。

状況証拠、凶器など有力な物証が発見されていない中、検察側が訴えたのは、客観的事実の「積み重ね」だ。

目撃された不審車両と同色・同型の車の所有、遺体遺棄現場方面を往復した車の通行記録……。とりわけ検察側は被告が検事に自白した後、自らの母親に送った謝罪の手紙を「犯行の自認行為」とアピールした。

弁護士は二十二日も、証言台の前に立ち、検察側が主張する状況証拠と被告人との「結びつきの